様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月２０日現在

機関番号：22604
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2012
課題番号：２２６５９４３２
研究課題名（和文）心理社会的健康問題の言語・非言語的表現パターンの分析とデータベース化

研究課題名（英文）Characteristics of linguistic patterns in verbal and non-verbal expression about psychosocial problems in mental health field

研究代表者
山村　礎（YAMAMURA MOTOE）
首都大学東京・人間健康科学研究科・教授
研究者番号：00260323

研究成果の概要（和文）：
心理社会的な健康問題があり、そのことを他者に伝える場合どのようなことをどのように話すのかという問題を検討した。心理社会的問題は現在のこととしては話されず、昔あった「こと」（過去形、現在完了）として語られ、また、各々の人にとって最も主要な生活の場である学校や、職場等で起きていることとしてではなく、極めて限られた状況で起きているという形で語られることが示された。

研究成果の概要（英文）：
In expressing psychosocial problems, clients or patients with psychiatric problems uses more frequently past tense form or present perfect continuous from than healthy group significantly. Client with psychosocial problems complains that their problems happened in minute situations apart from their main living area. They does not give no recent negative affection about symptoms to their problematic situations.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,600,000	0	1,600,000
２０１１年度	300,000	90,000	390,000
２０１２年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	360,000	3,160,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：心理社会的問題、形態素分析、違和感、語り、表現

１．研究開始当初の背景

精神看護領域あるいは地域看護領域の実践において心理社会的問題の重要性は繰り返し指摘されてきた。また、これらの問題への対処の中に精神看護、あるいは看護という行為の専門性の軸足は下ろされているとの考え方もある。すなわち精神障害に限らず、心理社会的な問題に対する対処は医療職、とりわけ看護職者にとって社会から求められる役割であり、また自らが自らに求める役割でもあるとの認識が存在していると言える。

しかし、心理社会的問題に関連する事象を、研究として、あるいは実践として取り扱う場合、看護の領域においては質的な研究と称される、言語主体のテキストデータを収集し、人の感性、思考による分析と、量的研究と称される、テキストあるいは現象を、単純化し

た数値を統計学的に分析する手法の２種に分類される傾向が強い。また、看護実践そのものを支える看護者の思考形態は、ほぼ間違いなく質的研究法に近いと考えられる。

臨床における実践では、心理社会問題は質的に処理されたテキストデータとして蓄積された上で、看護者にとっての「経験」と呼ばれるデータベースとなり、これらを看護者間で共有することで作り上げられた「了解可能性という参照枠 frame of reference」で処理される。つまり看護職者の経験のうちにすりあわせが行われ経験的にテキストデータが共有されてきたものと考えられる。

故にデータベースそのものを有しない新人や学生は直ちに臨床におけるテキストデータの意味を了解できず、また、解釈のあり方についても客観的に把握することが困難である一因となっている。

同様に考えれば、精神障害者本人や心理的困難をもっている対象者、あるいはその家族でさえも、これらの心理社会的問題のあり方を具体的に捉えられるわけではない。心理社会的な問題を他者に訴えるという行為に関して、何をどう表現してよいかわからないのはむしろ当然である。語られぬ真の問題を捉えるために不可欠と考えられている「傾聴」が看護領域で重視される一因は、表現方法の多様さと直喩的でない対象者側の表現方法にあるといえる。

少なくとも、医療者として何らかの表現方法と特定の心理社会的問題の有無が関連しているとの了解基盤が客観的に整えば、これらを看過してしまうなどの事態を回避でき、早期に適切なアセスメントを心理社会的問題に対して与え、対処することが可能になるものと考えられる。

そこで本研究では、従来の質的研究において主に扱われていたテキストデータに対して、量的な統計分析分析を適用する。従来のあり方においては折衷的分析方法となるテキストマイニング法を用いて心理社会的問題特徴との表現形式との関連を検討することを目的とした。

２．研究の目的

精神障害を中核に据えた心理社会的な健康問題を有する対象あるいはこの問題に関与する人々が、心理社会的な問題を形容、表現する際の言語的・非言語的な特徴を客観的なデータとして示すこと。

３．研究の方法

１）看護職の事例検討

第一段階として、保健師を中心とした事例検討におけるテキストデータを対象として、各看護職が対象とした事例の精神障害の状況あるいは、看護者自身が援助上困った問題をいかなる形式にて語るかを検討した。

対象は事例援助においていわゆる行き詰まりを感じた事例を紹介し、議論することで打開策を見いだしたいとの想いで実施された事例検討 10 件であった。すなわち援助者たる看護職が、支援という心理社会的な側面で新たな支援方策の実施に向けて動けなくなった状況を、保健師自身の問題として捉え語るという側面を持つ検討会であった。

検討会は各回２時間位をかけ、録音後、テキスト化しテキストマイニングを行った。なお、使用したソフトウェアは Text mining studio であった。主に事例提出者の語る援助上の行き詰まりをどのように表現するかを中心に分析した。

２）大学精神衛生サービス利用者と非利用者の心理社会的問題の語り

対象とした大学では各年度当初に学生に対して精神衛生チェックリストという、精神症状（例：人の視線が気になる）６項目についての有無と頻度を尋ねている。これらの情報を踏まえ、風邪などの身体的な問題も含め、保健センターを利用した際に、上述のチェックリストへの回答が現在どうなっているかを尋ねることとなっている。具体的には「４月にチェックしていた問題は今どうなっていますか」という問いを学生に問うている。

この問への回答結果を踏まえて、精神衛生サービスの提案や提供へとつなげ、学生の精神衛生の維持を行っている。今回は、この要支援かどうかという判断で、専門的な援助を要する群と必要としない群に分類し、各々の群において、当初の窓口での訴え方は異なっているかどうかを検討した。なお、この場合は、録音はせず、記憶の範囲で話した内容の記録を電子テキスト化し、テキストマイニングにて、用語の出現頻度差などを検討した。

各群間の差をみるために行った検定は、χ２検定と Mann-Whitney 検定、ｔ検定であった。有意水準は 0.05 とした。

４．研究成果

１）保健師の事例検討

援助経過中に困難を感じ、また行き詰まった保健師が自身の困惑を表現する形式の特徴として、困ったという感情自体が説明されることはなく、また、どういった事態やエピソードが感情を左右しているのかと言った点に直接的に触れることはなかった。

事例の当事者である相談者の相談を直接的な話法として模倣し状況を伝えるといっ

た報告者としての立ち位置は確保していると思われるが、相談者からみた事実経過の報告にとどまり、その中のどういった要素が保健師にとって、懸案であり、気になることであるかという特定と理由付けは成されていなかった。

このような状況は、精神障害にまつわる相談や受診時にみられることが多いと指摘されており、いわば、外的要因を説明することにより他者の意味づけを待つかのような雰囲気となる。ただし、客観的な事実を語る本人から感じる非言語的な表現としては、例えば土居（「方法として面接」）の指摘する「わかってほしい」といった感触は抑揚や、語気などに表現されているものと考えられた。

保健師は事実経過を保健師自身の立ち位置から辿り、事例に関連する人々の立場や俯瞰で見る立場などを獲得することにより、自由な発想としての援助計画立案が可能となる。これ以前の行く詰まった状況とは、特定の個人などに寄り添った関係における位置の固定であり、固定された位置からの記述は言語的表現形式としては、主語の固定となる。あたかも特定の人物の心理社会的問題を表現しているようにみえて、専門援助職としてのアセスメントを行う位置が消失してしまうことが援助上の問題の一因であるとも考えられた。

結果的に事例検討により比較的自由な援助職としての視点獲得への回帰は、保健師自身の「私」を主語とする言語表現に端的に表れていた。他者を主語とした、場合によっては、障害そのものや問題そのものを主語とした表現形式への過度の固定といった、特定の表現構造から脱却できない場合は、主体的な問題解決を行えないだけではなく、自己のおかれた現状を見る視点の喪失をも示唆しているものと考えられた。

２）大学保健管理センターにおける精神衛生相談を必要する学生群の当初の窓口の訴えからみる表現形式の特徴

①自己の経験からの距離と「私」

大学の保健センターにおいて、精神衛生相談を要すると判断された学生が、窓口において、入学時に調査アンケートに記入した問題が「現在どうなっているか」を尋ねてもらった。

これに対する回答の内容を記録にとどめ、その後精神衛生相談につなぐ必要があると判断された群（以下、「問題群」とする）、不要であると判断された群（以下、「健常群」とする）に分類し、両者の間で、使用される用語の頻度や、各々の用語の関連をテキストマイニングの手法を用いて分析した。その結果、語られるものの中心は、入学以前の事柄であったり、大学生活の外側の事柄であるなどのことが健常群に比べて有意に多かった。一方健常群は、心理的な問題チェックリストにおけるチェックを、今まさに起きている、あるいは最近起きていた、大学の中の問題として説明を行うことができた。そして、それらの問題にまつわる関連要因や経過や状況を多彩な角度から表現可能で、自分自身の経験としての位置づけの範囲内にある者と考えられた。

具体的には「人が見ている」といった表現と「人が見ている、と思っていました」は異なり、前者は問題がある群の一例であった。視線が気になるかという設問に対して、「気になるかどうか」という部分に回答を与えるか、視線の説明を行うといった両極の間に様々なレベルがあるものの統計学的には、自己の単なる経験としてのみ問題を語る形式での回答を述べる学生は、問題の認められた群には多かった。

保健師においても認められた主語としての一人称の語りの減少は、同時に、精神的な自由度を減少させると同時に、セルフコントローラビリティをも下げるのかもしれない。

②現症に関する質問に対する過去事象での説明

問題群で、現在このチェックした問題はどうなっていますかという問いかけに対して、入学以前や、最も長い時間を過ごしている大学以外の場での現症を持ち出す学生が健常群に比べ多かった。質疑という文脈からみても整合性を欠く回答であるともいえる。

過去に起きていた、すなわち「問題があった」という表現の仕方は、健常者の「現在もある」、「今はない」という表現とは異なり、現実の体験としての実感が喪失している様に思われた。また問題の起きる場所、時間などが主要生活空間から離れていると言うことでも、重要な問題でありながら、問題を語る学生にとって問題が矮小化されているのではないかと考えられる。

過去時制という時間的距離及び問題の所在場所と学生にとっての表舞台の隔たりは、これらの場所と時間感覚によって表現されているものと考えられた。こうした事態は、より精神病圏に近い内なる症状の感覚を示唆しうるが、「学生自身の形容、対処の範囲を超えた」という事実を形式として表現しているものと捉えることも可能であると思われた。

３）現行でのまとめ

各人の心理社会的な問題を語る言語形式

は、主語の置き方で社会的なあるいは対人関係上の立脚点を示し、時空に関する文章構造で、心理社会的な問題との距離感、形容の可能性、及び自我の関与の可能性を示しているものと考えられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計７件）

① 山村 礎，他:保健センターの健康管理サービスに対する学生の認知・利用・ニーズに関する調査(14)、全国大学保健管理研究集会．2012.10.18、兵庫
② 永利 美花，山村 礎，他:保健センターの健康管理サービスに対する学生の認知・利用・ニーズに関する調査(13)．全国大学保健管理研究集会．2012.10.18、兵庫
③ 中川 知佳，山村 礎，他:保健センターの健康管理サービスに対する学生の認知・利用・ニーズに関する調査(12).全国大学保健管理研究集会．2012.10.18、兵庫
④ 森田 牧子，山村 礎，他:長期入院統合失調症患者の退院にむけたケア　退院患者のセルフケア能力の検討.日本看護科学学会学術集会.2011.12.03，高知
⑤ 山村 礎，他:長期入院統合失調症患者の退院にむけたケア　退院を促進し再入院を防止する援助とは.病院・地域精神医学.2011.11.18，沖縄
⑥ 田上美知佳、山村 礎，他:長期入院統合失調症患者の退院にむけたケア　支援開始・継続に向けた検討.病院・地域精神医学.2011.11.18，沖縄
⑦ 中川 知佳，山村 礎，他:保健センターの健康管理サービスに対する学生の認知・利用・ニーズに関する調査　年度開始時点のアンケート結果から、その後の問題継続の有無を予測する．全国大学保健管理研究集会.2011.11.10.山口

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
山村　礎（YAMAMURA MOTOE）
首都大学東京・人間健康科学研究科・教授
研究者番号：00260323

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
新村　順子（NIIMURA JUNKO）
東京都医学総合研究所・研究員
研究者番号：96360700
田上美知佳（TANOUE MICHIKA）
東京医科歯科大学・大学院
研究者番号：70227247